様式Ｃ－１９

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 24 年 5 月 22 日現在

機関番号：３２６９９
研究種目：基盤研究（Ｃ）
研究期間：平成 20～23 年度
課題番号：２０５２００９４
研究課題名（和文）　近代日本画からの遡及――江戸時代写生画をめぐる図像と言説
研究課題名（英文）　Chart image and literary remark theory over realistic painting in Edo period; Retroactive effect from modern Japanese style painting

研究代表者
今橋　理子（IMAHASHI RIKO）
学習院女子大学・国際文化交流学部・教授
研究者番号：７０２６６３５２

研究成果の概要（和文）：
私はこれまで、江戸時代花鳥画に対する従来認識の再考を目的とする研究を行ってきた。その研究途上で、以下のような点を気づいた。すなわち今日、江戸時代美術史上において〈写生画派〉のカテゴリーに括られる円山四条派や秋田蘭画派などは、いずれも「近代日本画」という美術ジャンル創成期の明治時代において、画家や美術批評家たちによって意識的に見出されてきたのである。本研究ではこのような点を重視し、江戸時代以来の写生的な花鳥画の題材（motif）や画題（subject）が、従来では関連性は無いものと考えられてきた「美人画」というジャンルや、あるいは工芸意匠（デザイン）など絵画以外の美術ジャンルとも、きわめて近しい関係にあることを新たに明らかにした。このような事実は、現在の日本美術史研究ではいまだ理解されていない。そこで本研究では、具体的作品に基づく図像検証を重ねるとともに、新聞・雑誌記事の分析により明治～昭和初期における花鳥画についての「言説」についても検証を進めた。以上のような分析作業を経て、私は 2008～2011 年度までに、2 冊の単行本と 4 本の研究論文を成果として発表した。また 2012 年度中にも新しい単行本を発表予定である。

研究成果の概要（英文）：
So far I have done research that aims at reconsidering the conventional understanding of flower-and-bird paintings in the Edo period. In the process of the research, I noticed the following point: Maruyama-Shijo school and Akita Ranga school and others, which are categorized as “Shaseiga school” in the Edo art history today, were consciously discovered by artists and art critics in the Meiji era, when the art genre of “modern Japanese painting” was created. In this study, I took a serious view of this point, and made it clear that the motifs and the subjects of realistic flower-and-bird paintings since the Edo period are closely related to the genre of *“Bijin-ga”* (pictures of beautiful women) and the art genres other than painting, such as design of applied arts ―― both of which had been previously thought to be irrelevant to flower-and-bird paintings. However, this fact is yet to be understood in the present Japanese art history studies. So, in this research, I kept investigating images, based on actual artworks. And also, I advanced verification of “comments” that were made on flower-and-bird paintings from the Meiji period to the early Showa period, by analyzing articles of newspapers and magazines. Through the above-mentioned analyses, as results, I have published two books and four papers from fiscal 2008 to 2011. And I am going to issue another book in fiscal 2012.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2008 年度	1,200,000	360,000	1,560,000
2009 年度	900,000	270,000	1,170,000
2010 年度	700,000	210,000	910,000
2011 年度	700,000	210,000	910,000
年度			
総　計	3,500,000	1,050,000	4,550,000

研究分野：人文学
科研費の分科・細目：哲学、美学・美術史
キーワード：江戸時代絵画、近代美術、写生、画題、図像と言説

１．研究開始当初の背景
研究代表者はこれまで「江戸の花鳥画」に対する従来認識の再考を目的とする研究に従事してきた。そして次なる問題として今日〈写生画派〉に括られる円山四条派や秋田蘭画派などが、いずれも「近代日本画」というジャンル創造期の明治時代において、画家や批評家たちによって意識的に見出されたことに改めて思い至った。本研究ではそのような視点に立ち、江戸時代以来の「写生的花鳥画」の問題を、従来では関連性は無いと判断されてきた「美人画」というジャンルとの境界性を発見・主張するとともに、リアリズム表現として再解釈しようとした画家や作品群から遡及し、現代の美術史研究にまで影響を及ぼしている江戸の写生画に対する理解を再検証することを試みた。その結果、そしてこの検証は逆に、江戸時代当時では高く評価されながら、明治以後は久しく存在が忘れられていった写生画家や画派についても、同時に再考察を加えることとなる。

２．研究の目的
本研究ではそのような視座に立って、明治の近代日本画、とくに江戸時代以来の「写生」の問題を、リアリズム表現として再解釈しようとした画家や作品群から遡及し、現代の美術史研究にまで影響を及ぼしている江戸の写生画に対する理解を、再検証することを試みる。そしてこの検証は逆に、江戸時代当時では高く評価されながら、明治以後は久しく存在が忘れられていった写生画家や画派についても、同時に再考察を加えることとなる。

３．研究の方法
本研究課題では２つのケーススタディを設定した。秋田蘭画派および円山四条派以来の写生画を中心とした明治期における京都画壇である。「写生」の問題については江戸時代会がとの比較検証を行うため、竹内栖鳳、上村松園を扱う。とくに写生的花鳥画の問題は、明治期に至ると絵画のみならず産業的デザインとの関わりが見いだされるため、当時の美術雑誌等に現れた写生言説との関連について調べを進める。

４．研究成果
（１）二つのケーススタディのうち、秋田蘭画に関しては主に以下２冊の単行本を発表した。

①『秋田蘭画の近代』(東京大学出版会、2009 年 4 月)。同書では重要文化財の小田野直武筆「不忍池図」を中心に据え、明治近代以降の日本画を先取りしたようなその画題の斬新性や画面構成について論じた。結論的には、同作品の中に流れ込む江戸時代中期における中国趣味やそれを支える中国古典文学（唐代以来の漢詩文学）への傾倒や理解が、一見伝統的と見える花鳥画を別な文脈、すなわち一方では「美人画」として成り立たせている点を立証した。本書は 2010 年 3 月に第 22 回和辻哲郎文化賞（一般部門）を受賞した。
②秋田蘭画は明治時代の日本画家・平福百穂によって世に初めて知らされた画派であると言われている。百穂の秋田蘭画研究の集大成である著書『日本洋画の曙光』(1930 年刊行）は当初 300 冊しか発行されず長らく稀書とされてきた。2011 年 12 月にこれを岩波文庫版として改めて公開すべく、本書の美術史、および歴史的意義について、同書巻末の「解説」において詳細に論じた。

（２）江戸時代における写生的花鳥画がその後に及ぼした影響については、画題認識の転換という点で「美人画」との境界性を追求すると共に、文様（意匠）との関連など、計３つの論文を発表した。該当業績は下記項目［雑誌論文］①、②、［図書］の④である。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計３件）
①今橋理子「鸚鵡の肖像――〈花鳥画〉と〈美人画〉の境界」岩波書店『文学』第 10 巻 5 号、2009 年 9 月、121－137 頁。
②今橋理子「波と兎「月の光」のかたちと言説」、『学習院女子大学紀要』第 13 号、1－16 頁。
③今橋理子「了翁禅師と秋田蘭画」、『黄檗文華』第 13 号、2011 年、46－58 頁。

〔学会発表〕（計０件）

〔図書〕（計４件）
①今橋理子『秋田蘭画の近代――小田野直武「不忍池図」を読む』（単著）東京大学出版会、2009 年、全 400 頁。
②今橋理子「甦る江戸の桜――桜狂の画家・三熊思孝」、永田洋他著『さくら百科』所収、丸善、2010 年。
③平福百穂著・今橋理子解説『日本洋画の曙光』岩波文庫、2011 年、211－252 頁。
④今橋理子「鸚鵡と美女　伊藤若冲・花鳥画と美人画の境界」、小林忠先生古希記念論集『豊饒の日本美術』所収、藝華書院、2012 年、146－152 頁。

〔その他〕
①著書『秋田蘭画の近代』（東京大学出版会、2009）に関する書評・関連記事が 2009 年 5 月～2011 年 4 月までの間に、日本経済新聞、読売新聞、毎日新聞、秋田魁新報、岩手日報、熊本日日新聞、千葉日報、沖縄タイムス、山形新聞、新潟日報、図書新聞、読書人などにおいて複数取り上げられる。
②著書『秋田蘭画の近代』（東京大学出版会、2009）にて兵庫県姫路市主催・第 22 回和辻哲郎文化賞「一般部門」受賞。

６．研究組織
(1)研究代表者
今橋　理子（IMAHASHI RIKO）
学習院女子大学・国際文化交流学部・教授
研究者番号：７０２６６３５２

(2)研究分担者
なし　　（　　）

研究者番号：

(3)連携研究者
なし　　（　　）

研究者番号：